

# 『往生論註』所説の二身論と 『大智度論』第二十九卷所説の二身論について

曾 根 宣 雄

## 一、はじめに

曇鸞大師（以下、敬称を略す）の『往生論註』は、阿弥陀仏及び極樂浄土の有相莊嚴について詳細な説明を行っている。曇鸞は阿弥陀仏を本願成就の仏と捉えており、無相から有相莊嚴への展開もまた本願成就によって実現したものとして捉えている。

曇鸞は国土・仏・菩薩の三種二十九莊嚴を「広」とし、「入一法句」を「略」とし、「広略相入」の概念によって二種の法身を説明している。『往生論註』巻下には、

略説一法句故上国土莊嚴十七句如来莊嚴八句菩薩莊嚴四句為広入一法句為略何故示現広略相入諸仏菩薩有二種法身一者法性法身二者方便法身由法性法身生方便法身由方便法身出法性法身此二法身異而不可分一而不可同是故広略相入統以法名菩薩若不知広略相入則不能自<sup>②</sup>。

と説かれている。ここでは、法性法身によりて方便法身を生

じ、方便法身によつて法性法身を出すとし、この二身は異にして分かつことができないものであるとしている。

この二身の解釈としては、以下の二種類をあげることができ<sup>③</sup>る。

A 法性法身⇨理智不二の理⇨真如の理⇨法身  
方便法身⇨悲智不二の悲⇨有相如来⇨報身<sup>④</sup>

B 法性法身⇨理智冥合⇨法性の理を証得した仏（般若の慧）⇨阿弥陀仏の智慧⇨無分別智  
方便法身⇨莊嚴功德成就相⇨仏の利他の働き（方便の智）⇨浄土の莊嚴⇨無分別後智<sup>⑤</sup>

このうちAは、真如より報身の阿弥陀仏が生じるという流れにおいて無相から有相への展開をみるものであり、Bは阿弥陀仏の般若の慧（無分別智）と方便の智（無分別後智）によつて無相から有相への展開を捉えるものである。Aは、親

鸞の法語に基づいて二種法身説を解釈するものであり、真宗学の研究者に多くみられる見解であるが、曇鸞がそのように解釈していたとは考えにくいのである。<sup>(5)</sup> 従来、『往生論註』と『大智度論』の二身論（二種法身）の関連については、Aに基づいて論じられてきている。しかしながらBの解釈に基づくならば、これまで指摘されていなかった結論を導きだすことができるように考えられるので、以下それについて論じてみたい。<sup>(6)</sup>

## 二、『大智度論』第二十九卷に説かれる二身論

管見するところ『大智度論』の二身論に対する記述は、十力所ある。①法性身と父母生身<sup>(7)</sup>（第九卷）、②神通變化身と父母生身<sup>(8)</sup>（第十卷）、③仏身と法身<sup>(9)</sup>（第二十九卷）、④真身と化身<sup>(10)</sup>（第三十卷）、⑤法性生身と隨世間身<sup>(11)</sup>（第三十三卷）、⑥生身と法性生身<sup>(12)</sup>（第三十四卷）、⑦法性生身仏と隨衆生優劣現化仏<sup>(13)</sup>（第三十四卷）、⑧法身と生身<sup>(14)</sup>（第八十八卷）、⑨法性身と化仏<sup>(15)</sup>（第九十三卷）、⑩法身と色身<sup>(16)</sup>（第九十九卷）がそれである。このうち福原亮厳氏は、⑩の法身と色身の二身論をもつて『往生論註』の二種法身に近いものであると指摘している。<sup>(17)</sup> これら一々について検討を加えるべきであるが、紙面の都合上、本稿では『往生論註』の二種法身と関連すると思われる③の二身論を取り上げてみたい。<sup>(18)</sup>

『大智度論』第二十九卷には、以下のように説かれている。

問曰。十方諸佛。及三世諸法皆無相相。今何以故説三十二相。一相尚不實。何況三十二。答曰。佛法有二種。一者世諦二者第一義諦。世諦故説三十二相。第一義諦故説無相。有二種道。一者令衆生修福道。二者慧道。福道故説三十二相。慧道故説無相。爲生身故説三十二相。爲法身故説無相。佛身以三十二相八十隨形好。而自莊嚴法身。以十力四無所畏四無礙智十八不共法諸功德莊嚴衆生。有二種因緣。一者福德因緣。二者智慧因緣。欲引導福德因緣衆生故用三十二相身。欲以智慧因緣引導衆生故用法身。有二種衆生。一者知諸法假名。二者著名字。爲著名衆生故説無相。爲知諸法假名衆生故。説三十二相。<sup>(19)</sup>

まず「問うて曰く、十方の諸仏及び三世の諸法は、皆な無相の相なり、今何を以ての故に三十二相を説くや。一相すらなお不実なり、何に況や三十二をや」という問いがなされている。そして仏法には世諦（俗諦）と第一義諦があるととし、世諦故に三十二相を説き第一義諦故に無相を説くと述べ、福道と慧道が示され福道故に三十二相を説き慧道故に無相を説くとし、生身故に三十二相を説き法身故に無相を説くとしている。すなわち、真俗二諦説に基づいて説明がなされているのである。

ここで問題となるのは、点線を引いた箇所である。『大正藏經』及び『国訳一切經』では、「仏身は三十二相、八十隨形好をもつて自ら法身を莊嚴し、十力四無所畏四無礙智十八不共法のもろもろの功德を以て衆生を莊嚴し給う。二種の因縁

『往生論註』所説の二身論と『大智度論』第二十九卷所説の二身論について（曾根）

あり」と読んでゐる。三十二相、八十隨形好は仏の有相性を示すものであり、十力四無所畏四無礙智十八不共法は仏の無相性を示すものである。その無相なる十力四無所畏四無礙智十八不共法が衆生を莊嚴するというのは、どうにも意味不明なのである。

今、この部分が真俗二諦説に基づいた説明であることを踏まえて解釈するならば、「仏身は三十二相八十隨形好をもつて而も自ら莊嚴し、法身は十力四無所畏四無礙智十八不共法のもろもろの功德を以て莊嚴す。衆生に二種の因縁あり」（佛身以三十二相八十隨形好而自莊嚴。法身以十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法諸功德莊嚴。衆生有二種因縁）と読む方が妥当であらう。<sup>(20)</sup>

そうするならば、

ア 世諦 ・ 福道・生身・福德因縁―仏身（三十二相・

八十隨形好）―有相

イ 第一義諦・慧道・法身・智慧因縁―法身（十力・四無

所畏・四無礙智・十八不共法）―無相

というように明確に整理することができる。このうち、イは法身及び第一義諦とされるのであるが、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を具足するのであるから、理体そのものを指すのではなく理智冥合・理智不二を意味していると考えて良いだろう。一方アは、三十二相・八十隨形好という語か

らも明らかのように、仏の有相莊嚴を示すものである。すなわち、また、アが理智冥合・理智不二とするならば、アとイは一仏身上の問題として捉えられることになる。

『往生論註』に説かれる「法性法身」は、理智冥合であつて法性の理を証得した仏（般若の慧）を意味するものであり、『大智度論』二十九卷に説かれる「法身」は、第一義諦であつて智慧の因縁を意味するものである。つまり両者は、仏が無相の境界・真如の境界に入ることの意味している点において共通している。また、「方便法身」は莊嚴功德成就相であつて、仏の利他の働き（方便の智）を意味するものであり、『大智度論』二十九卷に説かれる仏身（生身）は世諦・福德の因縁、三十二相・八十隨形好を意味するものである。両者において共通しているのは、仏智の無相の境界・真如の境界に基づいて有相莊嚴を示している点である。

また、『往生論註』及び『大智度論』二十九卷所説の二身論が共に、一仏身上における無相と有相を説いていると見なされる点も注目されるであろう。

### 三、おわりに

従来、『大智度論』二十九卷の仏身論は『往生論註』の二身論との関連を指摘されてきてはいなかった。理由としては『往生論註』の二種法身を前述したAのように解釈していた

ことと、『大智度論』自体の読み方の問題の二点をあげるこ  
とができる。今仮に、『往生論註』の二身論を前述したAの  
ように解釈するならば、『法性法身』は真如の理を意味する  
ので、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を意味する  
『大智度論』二十九卷の「法身（理智冥合）」とは内容的に合  
致しないのである。けれども『往生論註』の二種法身を前述  
したBの「法性法身||理智冥合・方便法身||莊嚴功德成就相」  
と解した上で『大智度論』に説かれる仏身論との関係を考え  
るならば、第二十九卷の仏身論の概念こそが最も関連性を指  
摘できるのである。

1 「広・略」の概念は、『大智度論』第八十三卷の「略とは、諸  
法は一切空、無相無作、無生無滅なりと知る。広とは、諸法の  
種種別相を分別す」に基づいたものであると指摘されている。  
（藤堂恭俊・牧田諦亮著『浄土仏教の思想』四卷一五九〜一六  
〇頁参照）

2 『浄全』一卷・二五〇頁

3 主なものとしては、福原亮厳著『往生論註の研究』、『仏典講  
座二三 浄土論註』、幡谷明著『曇鸞教学の研究』、渡邊了生氏  
稿『浄土論註』広略相入の論理と道綽の相土・無相土論、『真  
宗研究会紀要』二四号所収などがある。

4 前掲『浄土仏教の思想』四卷一六〇〜一六一頁参照。

5 拙稿『『往生論註』に説かれる広略相入について―藤堂恭俊

博士の解釈をめぐる―』（『仏教文化学会紀要』第十号所収  
参照）

6 『大智度論』第二十九卷に説かれる二身論と『往生論註』に  
説かれる二種法身の関連については、かつて拙稿「法然上人に  
おける内証・外用」②（『佛教文化学会紀要』第三号）におい  
て些か指摘をしたことがある。

- 7 『大正』二十五卷・一二二頁a。
- 8 『大正』二十五卷・一三二頁c。
- 9 『大正』二十五卷・二七四頁c。
- 10 『大正』二十五卷・二七八頁b。
- 11 『大正』二十五卷・三〇三頁b。
- 12 『大正』二十五卷・三一〇頁b。
- 13 『大正』二十五卷・三一三頁b。
- 14 『大正』二十五卷・六八三頁a。
- 15 『大正』二十五卷・六八三頁a。
- 16 『大正』二十五卷・七一二頁b。
- 17 福原亮厳『往生論註の研究』四〇五頁。
- 18 なお、『大智度論』所説の二身論については、別稿において  
考察する予定である。
- 19 『大正』二十五卷・二七四頁c。
- 20 ちなみに『望月佛教辞典』四〇二九〜四〇三〇頁でも、この  
ように読んでいる。

〈キーワード〉『往生論註』、『大智度論』、二種法身、二身論

（大正大学非常勤講師・浄土宗総合研究所研究員）

## 7. Huisi's Preliminary Step in *samādhi* of the Lotus *sūtra*

Daigo TSURUTA

The *samādhi* of the Lotus Sūtra was taught to Zhiyi by Huisi on Mount Dasu. At that time Zhiyi reached a certain state. But Huisi judged what Zhiyi realized was the preliminary step. Huisi's preliminary step was to preach in accordance with the various living beings based on the Meaning of the Course of Ease and Bliss in the Lotus Sūtra. There are two ways. One is to preach infinite meanings in accordance with living beings, the *sāmadhi* with infinite meanings (無量義三昧). The other is to manifest various figures in accordance with living beings, the *samādhi* that manifest the various figures universally (普現色身三昧). After the two *samādhis* that manifest infinite meanings are obtained, the *samādhi* of the Lotus Sūtra that melds the infinite meanings into one is obtained. That is the perfect state at last.

## 8. The Meaning of *ganying* 感應 and *gantong* 感通 in Chinese Buddhism

Takeshige SUWA

Since the seventh century, several miraculous stories of Buddhism were edited in China. The famous historian of Chinese Buddhism, Daoxuan, understood those stories through the ideas of *ganying* and *gantong*. He interpreted the two words as having the same meaning, signifying specific and amazing phenomena about faith in Buddhism. His interpretation of the two words influenced later editors.

It is the aim of this paper to define Daoxuan's interpretation of *ganying* and *gantong* and its influence on later generations, and also to examine the role of miraculous stories in Chinese Buddhism.

## 9. On the Treatise on Two Bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa* juan 29

Nobuo SONE

No one has discussed the relation between the treatise on two bodies of

the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa juan 29*, because there are issues on interpretation of (1) the treatise on two bodies of the Buddha and of (2) the *Mahāprajñāpāramitopadeśa*. After due consideration of these two issues, I believe that the concept of the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa 29* is closest to the treatise on two bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu*.

#### 10. Jizang's Theory of Rebirth in Sukhāvātī: Wuliangshou visualization and the repentance of one beyond acquisition

Masahiko Itō

This study tries to clarify the Sanlun (三論) scholar Jizang's thought regarding Pure Land ideas. In particular it considers the Wuliangshou visualization (無量壽觀), and clarifies its relation to the repentance of the individual beyond the idea of acquisition (無所得人懺悔).

#### 11. The Judgment of the Buddha-kāya of Amitābha in the Chapter on the Three Buddha Bodies in the *Dacheng fayuan yilin zhang*

Kana HAYASHI

We find in the chapter of Buddha's land (Fotu zhang 仏土章) in Ji's 基 *Dacheng fayuan yilin zhang* 『大乘法苑義林章』 his discussion of the body and land of the Buddha Amitābha. Here it is stated that Amitābha's pure land combines the saṃbhoga-kāya and nirmāṇa-kāya lands. However, in the chapter on buddha-kāya, Sanshen yilin 三身義林 in the same work, there is a description which emphasizes that Amitābha is saṃbhoga-kāya, this opinion being justified by many scriptural citations. Especially Ji's interpretations of the *Guyinsheng jing* 『鼓音聲經』 and the *Guanyin shouji jing* 『觀音授記經』 are unique and original. Ji did not accept the theory of Pure Land Buddhism (Jingtujiao 淨土教) that ordinary people (*fanfu* 凡夫) would be able to be born in a saṃbhoga-kāya's land only by invocation of Amitābha. But I